

気になる子と保育[†]

－多様性に応じる教育の在り方Ⅱ－

伊東 明彦*・高柳 恭子**・岩渕千鶴子**・前原 由紀**・稲川 知美**
 高根沢伸友**・栃本 せり**・大山 裕介**・星野さやか**
 宇都宮大学教育学部*
 宇都宮大学教育学部附属幼稚園**

これまで、幼稚園教育の基本理念のもとに、「気になる子」一人一人の幼児理解や保護者へのかかわり方、専門機関との連携など、個々に応じた援助の在り方については研究をすすめてきた（実践センター紀要第32号で報告）。また、一人一人を支える園内の体制も整ってきた。しかし、幼稚園という場は、子どもと教師が共に暮らしているところであり、私達教師はその子の特性や行動の仕方、考え方、興味・関心等を十分に考慮し、共に暮らす幼児との関係性をも考慮しながら「保育」という営みを創り出していく役目がある。それが保育者の専門性であり、私達にしかできないことである。「気になる子」を中心に、今一度「保育」の在り方を見直していきたい。さらに、幼稚園での教育の成果を小学校以降の学校教育につないでいくための課題もある。これらを本園の実践を通して考えたことを述べたい。

キーワード： 気になる子、保育、多様性、発達観、幼児理解、つなぐ、園内体制、特別支援、連携

1. 研究のねらいと方法

(1) 一人一人の「理解」と「保育」の在り方を見直す

園内研修を通して幼児の多様性について理解が深まり、専門家との連携を通して一人一人の発達の理解への手応えも感じてきた。しかし、子どもの行動について解釈ができたことで「理解した」と思い込んではいなかったか。解釈することで子どもをある一定の枠にはめてしまっていたか。「気になる子」の背景を探るとその子の「心の中」を見ようとしてしまうが、その周りの人、モノ、出来事の「関係の網目」にその行動がおかれているということを視点に一人一人の理解と「保育」の在り方を見直していきたいと考えた。

(2) 幼児の変容を「関係の網目」の中で捉える

保育するという事は毎日を共に暮らすということであり、共に暮らす中で暮らしやすい関係になっていく。暮らしやすいことを「発達した」からだと

捉えてしまうことがある。特に小学校への接続においてはその子どものおかれている状況を理解し、どのような状況の中でどんな援助のもとに現在の姿が見られるのか把握し、伝えていく必要がある。また、「気になる子」の変容をその子自身の変容のみに求めず、「保育」でその状況を変えることで子どももまた変容することを期待し、様々な「関係の網目」を考慮して保育を構想していきたいと考えた。

2. 研究の内容

(1) 個の特性や興味・関心とクラスの保育

そもそも保育は一人一人の発達の状況に即しながら展開されるものであるが、特別に配慮が必要な幼児の場合にはその子の実態をさらに細やかに把握することが必要である。しかし、一人の子の幼児理解と援助に細やかになればなるほど、そのことに教師の気持ちが傾いてしまい、クラス全体の保育を構成していくという意識が薄くなってしまわないだろうか。ここでは、一人一人の存在をクラスの一員として大切にし、クラスの保育の中でその子の特性や興味・関心をどう生かして保育を構想するかについて、やよいの事例から述べたい。

ア 個人の実態を把握する

一人一人の実態を丁寧に把握するために、本園では事例検討会を定期的に行っている。園内で詳しく

[†] Akihiko ITOU*, Yasuko TAKAYANAGI**, Chiduko IWABUCHI**, Yuki MAEHARA**, Tomomi INAGAWA**, Nobuyuki TAKANEZAWA**, Seri TOCHIMOTO**, Yusuke OYAMA** and Sayaka HOSHINO**: Nuserycare and preschool education for "difficult children" -the whole concept of early childhood education considering the diversity of children II-

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** An Attached Kindergarten, Faculty of Education, Utsunomiya University

実態を把握していく際には、事例研究を定期的に行っている。しかし、その子の特徴を総合的に示したり、誰かに伝えたりするために、個別の教育支援計画として表にまとめ活用している。

イ 保育を構想していく

クラスの中で気になる子を含めた一人一人がその子らしさを発揮し、クラスの中での存在感を感じていく保育を構想する場合、考えたい要素として【クラスの実態】と【この時期の保育の見通し】、【活動・教材の多様性】に加えて【個人の実態】との関連性がある。これらのバランスを図ることが保育のかぎとなる。ここでは、あるきっかけとなるエピソードから保育を構想していく過程をやよいの事例で述べたい。

やよいの気になる姿

やよいは、教師には自分の思いを伝えることができるようになってきたが、自分一人の世界の話が多く、発音も不明瞭なので友達には思いが伝わらないことが多い。これまでは、やよいの得意な体を動かす場面で友達との接点を作ってきた。最近では自分から友達とかかわりたいという思いもでてきたようで、友達と接点をつくる機会を探していた。

きっかけとなるエピソード「三つ編みができたよ（9月）」

交流で園外に行ったとき、交流の先生に三つ編みの仕方を教わり、色違いの三つ編みを何本も作った。帰り道「先生、みて！！私が作ったの！」と両手にブレスレットにしてはめて、嬉しそうに持ち帰ってきた。一対一でじっくりかかわってもらい作ったことで、自分でできた満足感が大きかったようだ。

このエピソードから、なぜ、三つ編みを保育に取り入れたいと思ったのか。

【個人の実態から】

やよいが三つ編みに興味をもったことには大きな意味があり、全身を使った活動がほとんどだったやよいにとっては決して得意なことではない。しかし、三つ編みの活動は次にどの糸を上に戻すかと常に先を予測し見通しをもたないといけないことであり、物事の見通しがもちにくいやよいにとっては、三つ編みを理解していく過程は必要な経験であると考えた。また、このことをきっかけに友達に認められる機会を増やしたいと考えた。

【クラスの実態とこの時期の保育から】

友達と一緒に体を動かして遊ぶことが楽しくて、自分たちのやりたいことを見つけて遊んでいる。9月からはそれぞれのしていることが運動会で生かされるように保育を展開していきたい。作ることが好きな子たちには退場門や入場門の飾り作りなども考えている。三つ編みに興味を示す子は多いことが予想され、飾りの一つとしていくこともできる。まだ、クラスの中でできる子がいないので、やよいの存在を活かしながら保育を展開することができるのではないかと考える。

個人の実態とクラスの実態、今後の保育の見通しから、三つ編みは保育の中に取り入れていくことが有効であると考えられるが、保育を構想するためには教材についても考えておく必要がある。

【教材（活動）の多様性】・・・三つ編み

三つ編みができるようになることで様々な活動に広がっていくことが予想される。クラスの保育として、いろいろな子がアイデアを出し合って様々な遊びに用いることができると考えた。

【教師の願いと予想される援助】

やよいの場合、様々な場面に応じて細やかな援助が必要となる。従って起こりうる様々な状況を予想しておくことが重要である。やよいにとって友達に認められながら活動していくためにはどのような状況が予想され、教師はどのような援助をすればよいのだろうか、必要とされる援助を予想しながら保育を展開していく。

○その子の特性や興味・関心を生かした保育を構想するためのポイント

・実態を多面的に詳細に把握する

一人一人の行動の特性を理解し応じていくことはどの子にとっても必要なことであるが、特に「気になる子」においてはさらに細やかに実態を把握することが必須である。その際に一方的な見方ではなく、多面的にその子の特性を把握することが大切である。

また、発達を見通して、その子にとっての発達の課題（短期的な目標）を明確にしておくことも保育を構想していく上で必要である。その上で、援助の方向や方法が決まってくる。

・その子の発達の課題とクラスの実態、保育の見通しとの接点を見出す

その子にとってふさわしいと思われる新たな素材や活動を教師が投げかけることもあるが、うまくその子の実態に合う場合もあればそうでないことも多

い。しかし、その子の行動の特性を把握していれば、その子がある活動に興味を示した偶然の出来事も見逃さず、その子の実態と発達の課題とに意味を見つけることができる。さらにその時のクラスの実態とその時期の保育の見通しとの接点を見出していくことが、一人だけの援助に留まらず、クラスとしての保育の構想につながるだろう。

・今後の活動の見通しと援助の予想を多様にもつ

「気になる子」の場合、その子なりの行動の特性が特に強く表れていることが多く、活動を見通した時に、配慮が必要となる状況が予想される。その子にとってふさわしい状況を生み出していくために、起こりうる様々な状況を予想しておくことが重要である。その予想を多様にもっていることで、その状況に応じて活動や友達の組み合わせ等も含め、柔軟に環境を整えることが可能になる。細やかな援助をしていくためにじっくりと考慮したいところである。

・援助の網目をつくる

一人の幼児を多面的にとらえていることで、その子を支える援助のポイントが様々な場面で見つけることができる。やよいの場合も三つ編みの場面で友達との接点をつくる一方で、体を動かさず場面で生きる場を作ってきた。それらの接点をつながることが多い。また、これらのことを、「気になる子」だけでなく、実は、一人一人の幼児に対してしているのである。これら一人一人の援助が網目となって一人一人が活かされる状況を作ることができるのである。様々な幼児がともに生活を織りなす幼稚園だからできることであり、保育の中での教育の力の大きさを感じる。

(2) 気になる子の生き生きとした姿を支える園でのチーム保育

「保育室からすぐに飛び出して行ってしまおう」とか「クラスの友達になじめない」などクラスの中ではなかなか自己発揮できない子は、担任としては気になる存在ではないだろうか。このような時、自分一人で保育をしようとする、クラスの保育を展開しなければならぬ立場であるが故に、その子の思いを聞かずに、無理やりその子をクラスに連れ戻すことばかりを考えることにならないだろうか。研修などでは「そんな時は園全体でチーム保育をしましょう」などという解決案を耳にするが、チームで保育をすることはいったいどのような保育をすることなのか。「チーム保育」というと、ある1

時間の保育を想定して2人の教師が最初から役割分担を決めて、保育に臨むというパターンを思い浮かべがちだが、それは数ある「チーム保育」のパターンのたった一つにしか過ぎない。幼稚園教育要領でも「第3章 第2節 5 指導上の工夫」で、幼児一人一人の特性に応じた指導の充実を図る上でチーム保育は重要であること、チーム保育は、保育の展開、学級編制、教職員組織の実態に応じて工夫することが述べられているが、実際にチーム保育のよさを生かしていくのはそう簡単なことではない。ここでは、ある「気になる子」の指導の充実を図るために学級を基調としながらもその枠を超えて行った保育の事例を通して、改めてチーム保育のよさや難しさを述べながらチーム保育を展開する際の重要なポイントについて明らかにし、チーム保育を意味あるものにするために大切にしたいことについて、かずみの事例で述べたい。

かずみの気になる姿

クラスの中ではやりたいことがなかなか見つからず、自分に自信がないために、わざと友達遊びをこわしたり嫌なことを言ったりするので、クラスの友達から敬遠されがちであった。

【旧担任から指導のヒントをもらう】

旧担任は、昨年度の経験からその子が好きな遊びや人間関係などその子が生き生きと活動できるように保育のヒントとなるようなアドバイスをしている。それを受けて現担任は保育を構想しなおす。

エピソード2

コマが回せるようになり、うれしくなったかずみは養護教諭に回せるようになったことを報告に行く。

【それぞれのクラスの気になる子を意識する】

気になる子については、日頃から教職員間で話題にし、今どんなことに興味をもっているか、どんな心の状態なのか、園内の誰にどのような行動を起こせば安定するのか、また自信がもてるのかを考えながら、気になる子の必要感に応じて選択できたらよいと思う。

エピソード3

毎日、コマを回し続け、自信をつけてきたかずみ。ある日「旧担任の先生と勝負してみたい」と言い出す。

【互いの保育が充実するように考える】

どこのクラスにも「気になる子」はいるものである。だから、自分のクラスの子が、今、どこでどの

ように遊ぶことが豊かな経験につながるのかを考えると同時に、それぞれのクラスの保育がどのような方法をとったら一番充実するのかを考え、園全体の保育をコーディネートしていく。そのためには日頃から園内研修を重ねて園全体の「気になる子」について教師全員が把握していることが大切である。

エピソード4

旧担任が、一番先に一对一で勝負してもらう。

【教師一人一人の持ち味を生かす】

それぞれの教師には得意なこと、苦手なことがある。または、その人のもっている雰囲気や考え方に特徴がある。子供たちの様々なニーズに応えるために、一人の教師が場面や状況に応じて様々な人となりを使い分けられればいいが、それは不可能である。だからこそ、それぞれの教師が、それぞれの持ち味を十分に発揮し、互いにそれをいかしあう「協働的な関係」を構築して保育を展開するべきである。子供たちは自分の必要感に応じて、教師を選ぶことができるので、安定するのではないだろうか。

エピソード5

年長組の保育室で、こっそりコマの練習をする。

【それぞれのクラスの保育をみんなが把握する】

自分のクラスだけの保育に固執せずに、それぞれのクラスが、その日、何をねらってどこで何をしているのかを把握して、常に意識の中に入れて保育をすることで担任は咄嗟のときに迷わず判断し、行動することができるのではないだろうか。そのためには、園内研修を重ねて教育課程が教員間で共通になっている必要があり、今このクラスは何を大切にするかを全員が把握しなければならない。

エピソード6

旧担任の先生になかなか勝てないかずみは「自分のコマがほしい」と言い出す。

この時期にふさわしい経験はあるが、その経験はどのようなものを使ってもいいのだから、教材はそのときの子供に合わせて柔軟に考えてもいいのではないだろうか。もちろん、変えていいこととそうでないことは判断しなければならないが、時には子供に応じて柔軟に指導計画を変えることも大切である。

【次の学年につなぐ】

幼稚園から小学校への接続はずいぶん重要視され、多くの幼稚園、保育園と小学校で連携をはかる体制

ができつつあるが、意外と見落とされがちなのが、このように年中から年長への接続など園内で学年が変わるときではないだろうか。同じ園内にいるとはいえ、子供の立場に立つと、大きな環境の変化である。常に一人一人の子供の発達は連続していることを念頭に置き、指導法などを伝えるべきである。また新担任もそのことを鵜呑みにするのではなく、それを踏まえて自分の目でその子を見て、新たな指導法を考えなければならない。

○ティーム保育を意味あるものにするために

・担任のコーディネートしていく力がカギ
かずみの姿をエピソード1から7まで並べてみると、その心の繊細さに驚く。この心の動きにじっくり付き合わなければかずみは次のステップに進めないのだが、実際は担任の置かれている立場上、なかなかそれを叶えることが難しい。そのような状況で、やはり「ティーム保育」は強い味方である。しかし、その心の動きを一番身近に感じて、敏感に反応し、かずみにとって最適な状況を選択し、環境を整えていくのは「担任」である。「担任」がその子をどのように見て、園全体の動向も視野に入れながらその子を取り巻く環境をどのようにコーディネートしていくか、そのことがティーム保育がその子にとって意味あるものとなるかどうかのカギを握っている。

・園内研修を充実させることで

「ティーム保育」は、日頃からいかに教師間で指導計画や気になる子について研修を積んでいるかが成功のカギになる。ただ、教師間で協力をするといっても子供をどのように育てたいのか指導の目指す方向が共通でなければ、一人一人に対して複数の教師がかかわって適切なきめ細かい指導をすることはできない。また、自分のクラス以外の気になる子の背景を理解したりどのように育てるのかを話し合ったりしていないと、その子に対して一貫性のある指導ができずに、結果として子供が迷うことになるのではないか。一人一人の幼児に適切に対応するために、自分一人で問題を抱え込まずに園内研修の場で他の教師と幼児理解や保育の展開、指導計画について話し合っておくことで、咄嗟の時に教師同士の心が伝わりその子にとって適切なティーム保育を展開することができるのである。（園内研修については研究紀要第52号参照）

(3) 一人一人が心を動かす環境と保育の在り方
～研究保育を通して、様々な角度からその子の実態や保育をとらえる～

研究保育を通し、様々な教師で見合い、気になる子を含めたクラスの子供達の興味・関心に応じた教材や環境の構成、援助等であるか検討を重ねたところ、以下のような保育を構想する際のポイントが見えてきた。

- ・素材の与える影響を考慮する
- ・提示した教材の意味と援助のタイミングを考える
- ・見方を変える、思いを変える
- ・発達の時期に応じた教材と活動の意味を考える

(4) 一人一人への援助と保育の形態

いつもと同じ形態で保育をしていると、同じような観点で子供を見てしまい「気になる子」はいつも「気になる」ことになる。しかし、少し保育の形態を変えたり、仲間関係を操作してみたりするとこれまで見えなかった子供達の姿が見え、その後の援助の方向性が見えてくる。以下のエピソードは、異年齢保育を展開する中で、クラスではなかなか自己発揮できなかったしんじがはりきりようになったり、自信をもったりして、その後の生活が大きく変わったかわった事例について述べたい。

しんじの気になる姿

朝からぼんやりしていることが多く、動き出すまでに時間がかかる。また、人のまねばかりしていて自分の意思で行動することはほとんどなく、教師にもかかわろうとせず、限られた友達とだけ少しだけ話すだけでそれ以外はほとんど声を出さない。

<異年齢保育における教師の思いと援助>

しんじがだいきの様子をじっと見ているのを見て、何か気になる存在なのだろうと思い、徐々にかかわる場面を意図的に増やす援助を行った。だいきとかかわるしんじは、ほっとした表情をしているので、二つ目の劇では同じ役を勧めてみた。

異年齢保育でのしんじの様子

しんじは自分の出番に遅れてしまった。だいきは「しんじくんの番だよ。大丈夫だから出ておいで」としんじの声をかけていた。二つ目の劇では、二人は同じ役になった。みんなで演技方を考えていた時に、だいきが「先生、しんじくんがおもしろいことを考えたんだけど」と言うと、しんじはだいきの顔を見ながらぼつりぼつりと話した。だいきはここにこしながら見守っていた。

その後のしんじの姿

しんじの表情が明るくなり、朝早く走って登校すると友達と中庭に遊びに出ていく。教師にも自分が思ったことを大きな声で堂々とと言えるようになり、自信をもって生活している。

(5) 小学校への接続に向けての取り組み

① 引き継ぎの見直しと新たな取り組み

接続期の引き継ぎが上手く機能することで、気になる子の理解や援助・支援が継続し、その子の良さを生かしていくことが可能となる。しかし、教育観や教育方法の違い、特別支援教育体制の問題等から引き継ぎが上手く機能しない面がある。そこで、これまでの気になる子の引き継ぎの問題点から新たな引き継ぎシステムを構築していこうと考えた。

○これまでの引き継ぎの問題点

気になる子の引き継ぎの方法の確立されておらず、援助が一貫性、継続性をもったものになりにくい。

○新たな今年度の取り組み（引き継ぎ体制の構築）

・引き継ぎを修了前、年度末または年度始め、入学後1か月後、年度後半の時期で行い、引き継ぎのあり方について考える。

・引き継ぎ方法は、話し合いだけでなく、幼稚園参観や小学校参観を行い集団生活の中での気になる子の様子を知り、援助の方法を伝えたり共に考えたりする。

・四附属特別支援推進委員会で作成した引き継ぎ書を活用し、支援が継続していくためにファイリングして引き継いでいく。

②引き継ぎの実践

平成20年度は、気になる子の援助が一貫・継続していくために引継ぎを修了前、年度末また年度始め、入学後1か月後、年度後半の時期で行った。

・修了前

気になる子の個別の教育指導計画や参観の視点を事前に小学校に伝えておく。また、参観した様子を支援記録用紙に記入し、参観後の話し合いを行う。

・入学前

四附属特別支援推進委員会で考えた引き継ぎ簿を活用しファイリング化して小学校に引き渡せるようにしておく。また、具体的な援助についてはできるだけ1年生担任に直接伝えるようにし、援助で効果的だったグッズなどを引き継いだり、教室での座席や並ぶ順番など配慮が必要な場合は伝える。

・入学後1か月

事前に小学校に参観の視点を伝え、授業中と休み時間など一斉に活動している場面や自由に過ごす場面を参観した後、話し合いを行う。

・年度後半（10月頃）

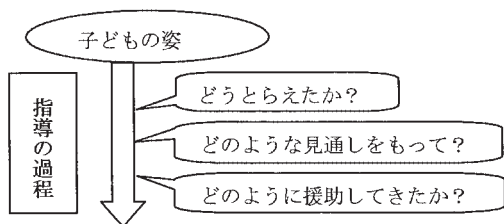
小学校の個別教育指導計画をもとに、気になる子の援助の方向性や、新たに気になる子がいる場合には情報交換をし援助の手立てを話し合う。

③引き継ぎの取り組みから見えてきたこと

これまでの引き継ぎの問題点を見直し、援助が一貫・継続していくために様々な時期や内容、方法での引き継ぎを行ったところ、以下のような引き継ぐ際のポイントが見えてきた。

・話し合いのポイント

幼稚園では気になる子をどうとらえ、どんな見通しをもってどう援助してきたのかの指導の過程を整理して話すことが必要である。



また、小学校からは、どのような状況の時にどのような気になる姿が現れるのか、その場合はどう対処するとよいのか、その子の良さを生かすにはどうしたらよいかについても引き継いでほしい点としてあげられた。今後の小学校生活でどんな場面で戸惑いどんな援助が必要かは、幼稚園と小学校が共に考えていくことで気になる子の見方や援助の方法が継続していくことになるであろう。

・参観で引き継ぐ場合のポイント

幼稚園・小学校参観という限られた時間の中で気になる子の様子を理解してもらうのはなかなか難しいことである。参観での引き継ぎが有効となるためには、細かなステップを踏んでいく必要がある。

<幼稚園>

ア参観前には、幼児の実態をまとめておき、書面で参観者に知らせていく

イ集団での場面を参観する（その子らしい姿が見られる場面を作り出す）

ウ参観後に話し合いをもつ

エ話し合いの観点から生活を見直す

<小学校>

小学校生活を見通して、援助の方向性を見直す。また、参観する場合は、特に事後の話し合いが大切であり、その日の気になる子の姿を話題にしながらか援助のあり方や方向性について共に考えることができる貴重な機会となるであろう。

・記録を活用する

引き継ぐ機会が十分にとれない場合は、個別の教育支援計画で小学校へと引き継ぐことも伝える方法の一つである。今回は、幼稚園の気になる子の記録に四附属特別支援推進委員会で作成した引き継ぎ書を付けてファイリングし小学校に引き継ぐことになった。小学校でも引き続き記録を重ねていき、学級担任が変わってもこの引き継ぎ書を見ればこれまでの援助の経緯が分かるようにしていく予定である。また今後、幼稚園から小学校だけではなく、中学校やその後までもと気になる子の育ちや援助の経緯をファイル化していくことで、長期にわたっての継続した援助が可能となっていくようにしたい。

・援助が継続していくために

気になる子をつなぐシステムの構築

引き継ぎシステムを確立することで、どの時期に誰がどんな内容をどう伝えていくかが明確になることで事前の準備も可能となり、引き継ぎの主旨が明確になり有効な引き継ぎとなっていく。そのためには、それぞれの園や学校内の特別支援教育体制が整備され機能していることが基盤となる。その上で、引き継ぎシステムが有効に機能し、援助が継続されて気になる子の発達を保証することにつながっていくのではないだろうか。

気になる子をつなぐための協働的な関係

気になる子への援助が継続していかない背景には互いの教育観や教育方法の違いなどがあることも事実である。しかし、参観や話し合いを何度かもつことで、気になる子を伝えるだけの関係から、話し合う、語り合う、共に考える、伝えた援助が生かされているかを確認し合える関係へとなっていった。幼稚園と小学校が互いの違いを理解し合い協働することで生まれる教育力もある。互いが附属学校園の子供たちという意識で取り組み、気になる子を共に援助していくためには、附属学校園の教職員たちがつながっていくことが必要である。

3. これまでの研究の成果と課題

(1) 研究の成果

これまで取り組んできた研究の成果としては、園内の体制（図1）が整い、内容が整理され、それぞれの機能が十分に働いており、図1については以下で述べたい。

① 幼児理解を深める

まずは、「気になる子」についての理解を深めることが必要である。そのためには「気になり方」について意見を出し合い、多面的に幼児をとらえ、事例をもとにその子の発達の課題を発達の見通しの中で明確にして援助のポイントを探ってきた。「気になる姿」の背景によって発達の見通しが変わるので、その背景を大きく分類してとらえてきたことで援助の方向がわかりやすくなった。また、一人一人の教員が発達障害等についての専門的な知識を習得することにより子どもの見方が洗練され、援助の方法も多様になってきた。これらのことは担任一人ではできないことではなく、園内の研修を工夫し充実

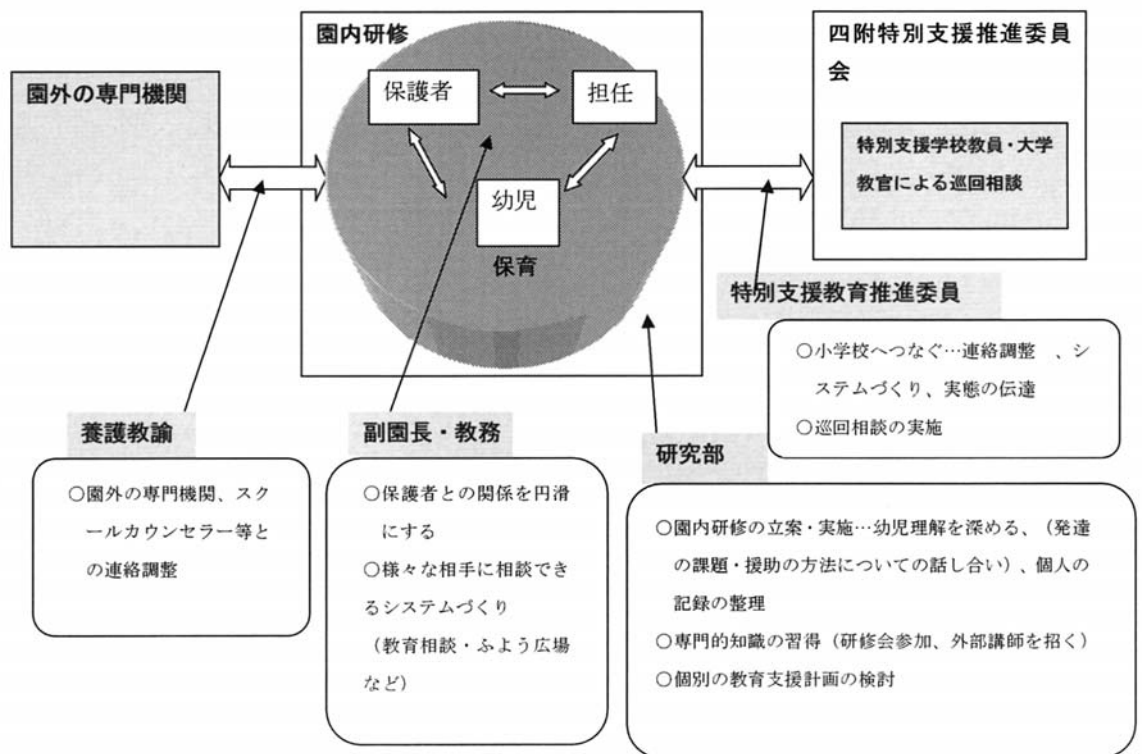
することにより、園全体の共通理解を図り全職員が同じ方針で一人一人にかかわることができる。

② 保護者との連携を図る

子ども一人一人の実態を保護者と共通理解し、共によりよい援助の方法について考えていきたいが、なかなかすぐにはそうもいかないことが多い。このことも担任一人ではなく、園内研修のなかで一人一人の保護者へのかかわり方等について検討してきたことで保護者を支えていくためのポイントが導き出されてきた。（本園研究紀要第52号P37参照）また、保護者の子育てを支える点では、保護者同士が話をし合い、アドバイスをもらえる、副園長による子育てサロン（ふよう広場）や教育相談の実施など、多面的に保護者を支える機会を作っている。

以上の2点（①と②）から幼児の理解と援助とともに保護者とのかかわりが園内研修によって支えられ、担任とそれぞれの関係がより円滑になっている。

<図1 本園の役割の実際>



< 図 2 本園における特別支援教育にかかわる研修会および保護者・園外組織との連携の進め方 >

		入園当初	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
園内 研 修 会	「気になる子」 についての 事例検討会	進級児(年長・年中)			新入園児			年長			年中・年少		
	研究保育を通 して 教員の専門的 な知識の向上	← 年間各クラス1回以上 →											
保護者との連携		← 園外の研修への参加			← 園外の専門家を招いての園内研修等			※必要に応じて			← 教育相談		
外部機関との連携		← 新任と担当者の話し合い			年長			年中			年少		
四附特別支援教育 推進委員会		← 年間各5回程度・小学校への接続に向けて →											

③ 専門機関との連携を図る

幼児期（特に満5歳未満）は、その行動の特性の受け止め方は迷うところはあるが、中には専門的なアプローチが必要な場合や保護者の支えとして相談機関が必要な場合など、様々な専門機関との連携が必要になる。適切な専門機関の紹介や専門的な見方からのアドバイスを保育に活かしたりするなど専門機関と協力していくことでより細やかな援助が可能となるのである（研究紀要第52号P50参照）。本園では、これらのことは養護教諭が窓口となり、保護者が相談しやすい雰囲気を作っている。本学では幼・小・中・特別支援学校の四附で特別支援教育推進委員会を立ち上げ、担当教員と大学の教官とで専門家チームを作っている。また、小学校への接続等のシステムの構築を目指してきた。

④ 多様なニーズに応じる園内体制の構築

幼稚園教育の考え方そのものが一人一人の教育的ニーズに応じていく特別支援教育の考え方に通じている。本園では特別支援教育も含め、養育環境の問題や心の問題を抱える子など様々な教育的ニーズを必要とする子に対して、幼児教育の理念に基づき、一人一人にとってふさわしい教育の在り方を検討してきたが、多様化する幼児の実態に即していくことは難しくなっている。今、幼稚園においても特別支

援教育コーディネーターを設置し、すべてを託すことが目的ではなく、園の実情に応じてこれまで述べてきた内容を園の中で誰が中心となって、どのように担っていくか、明確になっていることが重要なのだと考える。図2はどの時期にどのような内容の取り組みが必要かを本園のこれまでの研究から整えてきたものである。

(2) 今後の課題

日々の保育で教師が見る「幼児の姿」は教師のかかわりの結果として見えるものである。教師がどのようにかかわった時にどのような姿が見られたのか、常に教師との関係でとらえることが大切である。教師のかかわりを変えると幼児の応答も変わる。教師はうまくやり取りができた場合の経験を増やしていくしかなく、その蓄積が「保育力」である。その「保育力」をアップするには、園内研修を通して個々の教師の経験知を共有していくことであり、常に「保育力を磨く」ことが保育者の課題となる。また、近年は個々の教師の「かかわり方の試行錯誤」を共有しただけでは解決できないケースもあり、専門機関からのアドバイスは具体的な指導方法を構想する上で有効であり、多様な指導方法を学ぶ絶好の機会ととらえ、今後も積極的に連携を図っていきたい。

(※なお、論文内の幼児氏名は仮名です。)